

第5号 ちょびてご

学生支援センター 障がい学生支援室 発行



第4号に引き続き、「120cmの視界」と題し、車いすに関することについて紹介します。

地上120cmの位置から、街を見てみよう。見え方が変わる!? 120cmの視界といえば、ちょうど7歳の平均身長。草花に近く、もっと自然に近かったとき。そう、160cmの人が車いすを利用するとき、それが「120cmの視界」。

現在本学では、学生、教職員7名の車いすを利用する方がいます。まず車いすを利用している学生の声をお届けします。



平成時代の風雲児 (自称) ハンドルを握った渡り鳥

— 理学部物理学科 3回生 塩飽 顕光 さん —

●ウイーン～♪カチッ、ウイーン♪

ウイーン～♪カチッ、ウイーン♪「こんにちは～」塩飽君の声は明るくよく通る声だ。障がい学生支援室に彼が訪れると花が咲く。彼は、赤いフレームのB級アメリカンヒーローマシーンをコンセプトに「レッドフェニックス」と命名した愛車（電動車いす）に乗っている。専攻は物理学。「圧倒されるでかさがあるよ。世界を相手にしている感じ」と彼。

●病気、そして車いすとの出会い

小学2年生のとき脊髄の病気に罹患。この時と、中学2年時、高校3年時と手術を繰り返した。そのときの痛みや苦しかったことを彼は語らない。語るのは「病院の食生活に飽きている自分に高校の校長先生は焼き餃子を差し入れてくれた～。うれしかったなあ～。」見舞客とのエピソードや訓練時の理学療法士、看護師、医師とのエピソード。彼は、2回目の手術のあと現在の電動車いすの前身である手動の車いす「レッドフェニックス」を愛車とし、高校1年時現在の電動車いすにするためパーツを交換。

●頼れば生活できるんです！

現在彼は津島キャンパス近くのアパートに暮らす。生活の一部を家族に頼る。彼は言う。「頼らないと生活できない。いや、頼れば生活できるんです！」と。玄関前や玄関の中の段差には、入居時に簡易式のスロープを設置。彼のアパートを訪ねる友人は、そこで彼の愛車

に試乗。みんな意外な体感速度にびっくりする様。「車いすは楽しい。みんな乗って見ないか～。」

●車いすのある風景

津島キャンパスまでは、家族のリフト付きの車で通学。身障者用駐車場の利用は、まずまずスムーズという。彼が履修する授業では、車いすがある風景があたりまえ。入学当初は、やはりそうではなかったという。今では、そこにいる誰かが椅子を取り除き、車いすが机に滑り込めるようにし、狭い通路はそこにいる誰かが通りやすく開ける。「取り除いてあげる」でもなく「開けてあげる」でもない。彼の周りには岡大生に「〇〇してあげる」という「あげる」はない。自然な当たり前の車いすのある風景。

●車いすの彼が助ける

20歳を過ぎた彼は、もちろん居酒屋にも車いすで行く。そのことがお店の何かを変えていつている。玄関の段差やスペースに、まなざしの高さ…。物理的な段差に心の段差は変わるだろう。居酒屋で懇親を深め、気持ち良くなった彼らは、車いすの彼を先頭に帰路に。なぜか、一人ではなく、二人の友人が電動車いすを押している…。いや、彼の助けを借りていた。「キャンパスで僕を見かけたら、気軽に声をかけてください。」ぜひみなさんも底抜けに明るい声のレッドフェニックスを愛するキュートな彼に出会ってください。(文責：本多)



世の中を「視点」を変えて見たならば。

塩飽 顕光 (高校1年時作品)

私が世界を見る「視点」は、おおよそ70センチメートルである。高校生にもなって、70センチメートルという「低視点」には理由がある。私は車いすに乗って生活しているのだ。

昨年の夏から車いすを使っている。この70センチメートルという「視点」は、3～4歳児の身長である。車いすに乗ることによって私の「視点」は車いすに乗る前の半分以下になってしまった。今まで、上から見下ろしていた友人を下から見上げなければならず、「ガリバー旅行記」の巨人の国に連れてこられたようだった。

しかし、ある春の日、車いすで「巨人の国」の田んぼの土手を散歩していたところおもしろい発見をした。土手の草原の中にてんとう虫4匹を一瞬で発見したのだ。ここ3、4年でんとう虫を見た覚えがなかった。そういえば、小さいころはよく昆虫を見つけていたはずなのに、いつのまにか、草原など気にもとめなくなっていた。おそらく、3、4歳児の「視点」になったから、3、4歳児の「感性」が復活したのだろう。

世の中に飽きたという人には「視点」を変えることをオススメする。例えば、3、4歳児の眼の高さになれば、3、4歳児の感受性が身につく。徒歩で奥州を学べば松尾芭蕉の感性が身につくかもしれない。

それは車いすの私に神様がくれた粋な「プレゼント」なのかもしれない。

*この作品は東洋大学2006年度「現代学生コラム」自由題第11期1773作品の中15作品の入選作。

岡大キャンパスで見かけた

スロープと自転車駐輪



岡大キャンパスはとにかく広い。構内を自転車で行き来する人が多いのは当たり前。そんな自転車を必要とする岡大キャンパスをやさしいまなざしで見よう。みんなが快適なキャンパスづくりにみんなで取り組もう。それは一人ひとりの心がけ。
●たとえば、木曜日2限目の一般教育棟D棟北側の様子（撮影日：4/21・6/9）



この自転車の数！「あれっ、黄色の線は何？」これは「駐輪禁止スペース表示」

●さて、じゃあスロープはどうなってる！？（撮影日：4/21・6/9）



「わっ、いずれの日もスロープの入口は開けている…
や・さ・し・い…！さっすが岡大生！」

●この周辺の駐輪場はどうなっている？



この駐輪場はどこ？
ここは、同じ日同じ時間のD棟南側の駐輪場です。「ガラガラですよ〜！」
授業終了時、自転車の将棋倒しに苦戦するなら、この駐輪場を活用しよう！
そうすれば、黄色の線で表示している「駐輪禁止スペース」も確保できますね。



ひ

と

や

す

み



私は今年2月に着任したばかりですが、「さっすが岡大生！」と思うことによく出くわす。当たり前といえば当たり前のことなのかもしれないけれど。車いすの学生とエレベーターを待っていると扉が開くと同時に学生の顔。ちゃんと一礼し、エレベーターボタンの延長をサポート。大きな荷物を持っていると大丈夫ですかと声をする。電話連絡すると「お疲れ様です」と自然な挨拶。濡れた傘は扉の前で水滴を取り除く。広くない通路や階段では、板になって歩かず、ゆずりあう。当たり前かもしれないけれど「よっ、岡大生！」と声をしたくなる。日常性の中で心が響くキャンパスだ。

岡山弁だろうか…、「〇〇してあげら〜」という言葉をよく聞くし、使う。

『「してあげる」「してあげる」「してあげる」何か恩着せがましい。「する」と言えばいいことを。』という新聞投稿を目にしたのは昔のことだ。「してあげる人」と「してもらう人」。塩飽君が言った。「世界中のすべての人間は二種類に分けられる。世界中のすべての人間が二種類に分けられると思いついていてる人間と、分けられないことを知っている人間に。」「さっすが岡大生！日常の心に響く出会いに感謝！」（本多）



岡山大学 学生支援センター 障がい学生支援室

- 場 所：一般教育棟 D棟1階（平成21年4月開設）
- スタッフ：室長 松岡 洋一（併任）
准教授 本多 浩子（専任）
支援コーディネーター 平田 久子（特別契約職員）
- 開設時間：開室曜日 月曜～金曜日（休日除く）
開室時間 午前8:30～12:00 午後1:00～5:00
- 主な業務：*障がいのある学生に対する学生生活及び授業支援、相談等
*障がい学生の支援に関する職員、学生に対する啓発活動
*学生ボランティアの養成、交流会、勉強会の開催
*バリアフリー体験講座「ユニバーサル疑似体験」等
*学内修学支援事業実施担当者及び学外障がい者支援機関との連携・調整
*学内施設・設備の改善等提案 他
- 連絡先：086-251-8553（支援室）・8563（本多）